

〔嬉遊笑覽二中器用〕薦僧笠と云は熊谷笠なり、今の薦僧笠は、い後日男、こも僧の出立をいひて、熊谷笠とあり、又洞房語園に、熊谷笠八所とち、八所とちといふも、昔々物語の熊谷笠こも僧笠と并べ去るは是なるべし、吉原大枕に、深きもの熊谷笠とあり、此笠深しといへども、今のこも僧がきるやうなる物にあらず、其積が賢女心化粧四、俄に尺八をけいこして云々、摺鉢をみるやうな編笠をと、のへといへり、其形おもふべし、我衣に薦僧の笠、享保より小ぶりにて深く作ると云り、此説非なり、寛延ころの江戸繪に、こも僧を風流に書たるに、美服きたれども、笠いま浪人物もらひの著る、前の處に物見の穴あきたる笠にて、形も裾廣なり、今のこも僧笠小ぶりにて、上下廣狭なく、深く蒼みたる笠は、寶曆明和の末の頃の畫よりみえたり、

〔柳亭筆記四〕熊谷笠

くまがへ笠は深き編笠なり、江戸に多し、三谷へ通ふ武士の奉公人好みて是を著せり、江戸にても町人はさまで著せず、上方筋にもまれくくに是を好む者あり、六法むきにはさもあるべけれど、先姿野卑にして、人の目に立事甚し、よく似あひたるは普化僧のみなり、必是を著すべし、小あつもりの淨瑠璃に、熊谷の木偶が此笠をかぶりしよりの名か、其名義不詳此説非也、武州くまが略中四季咄貞享年問印本に熊谷の中笠といふ事見えたるは、熊谷笠のうちには、形のちひさき方をいふなるべし、人倫訓蒙圖彙元祿三年印本六の卷に、略中略當世忍笠熊谷笠ありと記したれば、元祿の頃までは、まれくくには、かふるものもありしなるべし、

〔守貞漫稿二十九〕天和 編笠略

是乃熊谷笠也、延寶、天和、貞享專ラ流布、蓋少女ノミ用之、中年以上ノ女不用之、又江戸ノミ用之、京坂ハ少女モ不用之也、江戸ニテ少女ノ用フル專トス、故ニ小女郎手ト云、

〔紫の一本山上〕待乳山略、中此山の風景言語に及びがたし、彼土手通ひする二挺立の船は、淺草川よ